「鮭の皮」

横山シシファ美麗　（10 代）

私の家は、夕方になると「ご飯できたよ。」というママの声が家中に響く。弟は「あと 1 分！」と言いながらなかなか部屋から出てこず、私は「早く来て！」と怒鳴る。そんなやり取りを繰り返しながら、気づけば三人で食卓を囲み、「いただきます。」と手を合わせる。それが私たちにとって、ごく当たり前の毎日だった。

弟とは、毎日のように言い合いをする。残っていた焼き芋をどっちが食べるかで競ったり、自分のほうが頭が良いとかモテるとか・・・。本当にどうでもいいことで喧嘩して、くだらないことで笑い合ったりする。

でも、不思議なくらい弟は、私の小さな変化に敏感で、学校で嫌なことがあった日や自分の将来に不安になった時、励ましの言葉はないけど、くだらない話をして、ふざけて、気づけば私は笑っている。その何気ない優しさが私の心をいつも軽くしてくれた。

そして、ママは食事の度に、決まってこう言う。「これ食べなさい。大きくなるんだから。」
私は、「でも、ママも食べなきゃ。」と返す。するとママは、いつも笑いながら言う。「私は、もう大きくならないから。」
小さい頃、その言葉が少しだけ嫌いだった。ママにも食べてほしいのにと思っていたから。

鮭を焼いた日は、ママは自分の魚の皮だけをそっと外し、何も言わず私のお皿へ置いた。パイを焼いた日は、一番香ばしく焼けた端っこを「はい、あげる」と笑って渡し、みかんは、小さな粒を見つけて「見つけた！」と少し得意そうに差し出してくれる。
少し変わった好みかもしれないけど、全部私の大好きなものだった。

あと 8 か月で、私は 18 歳になる。そして、将来のことを考える時間が増え、進学や一人暮らしの生活の事も。自立したい、色々なことに挑戦したい、世界を見て、自分の人生を歩

いてみたいと思う様になった。でも、その未来を思い描くたび、胸の奥が少しだけ締めつけられる。

日々の弟との言い合いも、いつかは年に数回しか会えない中で交わす冗談になり、ママと囲む夕食も帰省した時だけの特別な時間になるのかもしれない。

そんなことを考えながらある晩、箸を動かしていると急に涙が止まらなくなった。

「どうしたの？」と聞かれてもうまく説明できなかった。

だって、私は今を生きている。それなのに、まるで今を懐かしく感じている。

夕飯の時間がもう少しだけ長く続けばいいのに、夜がもう少しゆっくり更ければいいのに、明日がほんの少しだけ遅く来てくれたらいいのにと思う。

それは、未来が怖いからではない。この何気ない毎日が、どれほど幸せだったのかに気づいてしまったから。

いつか、家を離れて食卓に並ぶ鮭を見て、私は今を思い出すのだろう。そして、ママの笑いながら言う、「これ食べなさい。大きくなるんだから。」の意味を考える。

人を思いやれること、誰かの好きなものを覚えていて、言葉にしなくても愛を伝えられること。そんな人間になって欲しいと願っていたんだよね。